

# 笑顔とともに、おいしい卵を お届けします

—愛媛飼料産業株式会社—

職場  
ルポ

EMPLOYEE REPORT



(文) 清原れい子 (写真) 小山博孝



愛媛飼料産業株式会社

〒790-0962 愛媛県松山市枝松5-8-30

TEL 089-945-3311 FAX 089-945-3318

鶏卵の生産や出荷の工程で働いている知的障害者。今回は、笑顔が印象的だった松山市の愛媛飼料産業株式会社の職場をご紹介します。

## 「ピージョイグループ」として多角経営

市街地の中心にそびえる松山城。松山市の中心から少し離れた郊外に、愛媛飼料産業株式会社がある。ここから一日に出荷される卵は約三〇万個。工場では、次々と卵がパック詰めされている。

愛媛飼料産業は、畜産飼料の販売会社として一九五〇年に設立され、五六年から鶏卵の集荷・販売、その後、採卵養鶏場を始めた。六一年には「愛媛食鳥産業株式会社」を立ち上げてプロイラーの販売を開始、九三年に「愛媛食鳥……」の社名を株式会社ピージョイと変更した。

今日では、ピージョイグループとして、「Be Joyful」——楽しくあれ」をモットーにさまざまな事業を展開している。養鶏場、養豚場のほかに、水産飼料の製造販売と活魚の販売、仕出し料理・弁当・惣菜、ハム・ソーセージなどの製造販売、そのほかマンション、喫茶店、ビジネスホテル、ガソリンスタンド、焼肉レストランの経営も手がけている。

採卵養鶏場周辺の開発が進み、環境問

題がクローズアップされると、山奥に移転。二〇〇〇年にはその跡地に温泉施設と大型ショッピングセンター、アウトレットをオープンした。

ピージョイグループの中核、愛媛飼料産業常務取締役の川中国裕さんに、多角経営の歩みをうかがった。

「もともととは配合飼料を販売していた会社ですが、牛肉、豚肉、鶏肉の販売がだんだん主流になりました。その後、畜産物だけではなく、養鶏場の跡地利用で温泉施設とアウトレットをつくりました。大きくわけますと、愛媛飼料産業が生産、ピージョイが販売を中心にして、第三の事業が温泉とアウトレットとなっています」

神戸に支店、宇和島には水産部門を中心にした南予飼料産業がある。

「いまは愛媛県内が主流ですが、神戸では食肉販売、今年大阪に設ける事業所を拠点に活魚や魚の加工品も販売してい



川中国裕常務取締役・執行役員

こうと考えています。これからは、卵と食肉と魚を販売していきたいですね」

愛媛飼料産業の社員は約一〇〇名、パートが四〇名。ピージョイグループ全体では約五〇〇名の社員がいる。広大な放牧場の跡地を、牛や鶏などを放し飼いにした観光牧場にしようという計画もある。

## 養護学校とのつながりで障害者を雇用

愛媛飼料産業では、家畜やペットの飼料販売、養鶏や養豚の農場経営、鶏卵事業、さらにガソリンスタンド、マンションの経営などを行っている。

常務の川中さんは、障害者雇用を始めたところからの事情に詳しい。

「障害者雇用のきっかけは、いまから十年ほど前、県立第三養護学校の先生から就職をさせてほしいと頼まれたことが



重見俊樹鶏卵事業部営業課長



検卵・洗浄等のため、ラインにのせる  
永見哲史さん

きっかけでした。どれくらい作業ができるかわかりませんが、実習をして見せていただいて、大丈夫だろうということで翌年採用いたしました」

愛媛飼料産業で働く知的障害者は七名。養鶏場と養豚場で一名ずつ、鶏卵を出荷する工場で五名が働いている。

九六年秋、最初の二名が地元ハローワークの紹介と、県内の通勤寮からの依頼で入社した。翌年には、県立第三養護学校から二名が就職。その後も、職場実習を経て第三養護学校の卒業生が就職し、現在は四名になっている。愛媛飼料産業以外に、ピージョイでも同校卒業生四名を含む障害者六名が働いており、グループ全体では障害者の数はさらにふえる。

「第三養護学校からは、職場実習して働けそうだと思う人を採用してきました。九七年から採用が続いたのは、パー

トさんの退職とのタイミングがあつて、空きができたからです」

現在、障害者雇用の担当は鶏卵事業部営業課長の重見俊樹さんだ。

「職場実習では、態度やあいさつ、仕事のスピードなどを見て、配置される職場と私とで点をつけていきます。鶏は次々と卵を産みますので、一日に約三〇万個をパック詰めます。スピードに慣れない人がいると全体の流れに響きますので、スピードはある程度厳しくチェックします。卵の扱いには、ていねいさも必要です。汚れとか割れのチェックが確実にできるか見えています」



農場から運び込まれた卵の入荷作業を担当する和泉義人さん。入社して7年のベテランだ

## 特別な対応はせず 職場に配置

常務の川中さんは、採用時に親と学校の先生を交えて話をしてきた。

二年生で通常の職場実習を行い、採用を前提とした実習は、三年生の夏秋と採用直前に三回行う。これまでの職場実習で、働くのはとても無理……という人はいなかった。

「学校で選抜をされているのだと思いますが、スピードがとても遅いとか、雑だとか、あいさつができないという人はまずいませんね。あいさつは、社員より元気がいいし、明るいし、活気が出て仕事がかどるといふような面もあります」



鶏卵センター（松山市松末2-1-45）

「親御さんと学校の先生には、『就職すれば、一般の社員と同じです。障害者だ」という意識ではなく、同じように接します。悪いときは怒りますし、いいときは誉めます』とお話しています」

一人前に扱われることは、知的障害者にとって居心地がいいと思う。

「職場の人たちにも、特別な対応はしていません。『今日から新しい人が入りますから、よろしく』と、ごく当たり前前に話しています。いままで、配置した職

場からの反発はなかったですね。一緒に働いているパートの人たちは、自分の息子、娘のような感じで面倒をみてくれていると思います」

給料は日給月給制。最賃除外申請をしている人もいる。

「その人の作業量に合わせて、認めざるを得ないという人には申請をしています。レベルアップすれば、除外申請をする理由がなくなりますが、いつまでも除外をしているわけではありません」

これまでに三名が退職した。通勤寮から来ていた一名は寮内のもめごと、一名は異性とのトラブル、一名は休みがちだったとか。

勤務時間は朝八時半から夕方五時半まで。いまは、全員が親元から通う。

「現在働いている人たちは、まじめに仕事をしています。たまに休むときは、きちんと連絡がありますし、よほどでないとい休みません」

ただ一つ、障害者雇用を進めるのにネックがある。養豚場や養鶏場は人里離れた、交通の便がよくない場所にあり、通勤がむずかしいのだ。



小田さんの隣で、負けずにネット詰め作業に励む吉岡春香さん



卵をネットに入れる作業の名人、小田葉子さん。1時間で100袋ほど処理する

「養鶏場で働いている人は、自宅から最寄駅まで自転車で行き、駅に自転車を置いて列車に乗り、到着駅に置いた自転車で、養鶏場まで通っています。以前は駅まで送り迎えをしていました。養鶏場などの仕事はたくさんありますから、雇用はしたいのですが、通勤の問題がネックになりますね」

## 欠勤なしで 集卵・出荷作業

卵の生産から出荷までをたどると、生産農場から集められた卵は、毎日「鶏卵センター」に届く。センターで、破卵・汚卵を除く検卵、オゾン水のお湯での洗浄殺菌、乾燥させた後、さらに透光検卵法で破卵・汚卵の除去、紫外線殺菌、卵重測定、再び紫外線殺菌、パッキング、ラベル投入、卵殻への賞味期限の印字などを経て、出荷となる。パック詰めは、自動パッキング装置で毎時六、〇〇〇パックの充填ができる。

通常、養鶏場からスーパーに並ぶまで二、三日。鶏インフルエンザが世間を大きく騒がせたときも、卵の売れ行きはそれほど変わらなかったという。

二階事務室でお話をうかがった後、一階に降りて、川中さんとセンターの中に入る。ここで働いているのは、農場から届いた卵をコンベアに乗せる作業に男性二名、パッキングのラインに女性一名、ネット入り卵の作業に女性二名の計五名だ。

永見哲史さんが、一つ一二〜一三キロあるという卵が入ったケースを台車に積み上げ、運んでいる。

「緊張しているのか？」と常務。「返事

はあまり返ってきませんが、声をかけるとニコッとします」

和泉義人さんは勤続七年のベテラン。電動の運搬リフトを扱い、卵ケースをきちつと積み上げていく。「この卵はおいしいですか」とたずねると、「ハイ、おいしいです」

「二日のうち、暇な時間帯はありません。機械が動いているといつも忙しいですよ。休まずに働いてくれているのがいちばんですね」

## ネット入りの「うぶ」は 手作業で

産み初めの卵は「うぶ」と呼び、ネット入りで販売している。卵が小さいため、パック詰めでは売れなかった。そこで、



川中常務のアイデアで生まれた、空缶を利用したネット詰め。作業が早く、スムーズだ



小田さんや吉岡さんの手で詰められた商品

一工夫。ネットに入れたら、売れ行き好調になった。

「鶏は、約七〇〇日卵を産ませると入れ替えます。最初の一カ月の産み初めは、味は同じなのですが、卵が小さいんです。どうにかして売りたいと考えたのが、ネット入り卵です」

東京近辺では、スーパーでSサイズのパック入り卵が売られているが、ネット入りの卵は見かけない。卵の売れ筋にも土地柄があって、愛媛県ではSのパック入り卵はまず売れないのだそうだ。一つのネットは一二個入り。おいしそうに見えるが、卵がカップの上盛りに上がっているの、積み上げることはできないし、



菊間ファームで集卵作業をする西元利明さん

ネットに入れる手間もかかる。「いろいろな試行錯誤をして、手ごろな大きさの空き缶にネットをかぶせ、プラスチックのカップを置いてから中に卵をストンと入れるようにしたら、うまくいきました。手作業ですから、本来なら価格を高くしたいのですが、そうはできません」

常務の「一工夫」で、簡単になった作業を担当するのは、小田葉子さんと吉岡春香さん。その日はわりとゆつたりとして見えたが、スーパーの特売が入ると、作業量がドーンとふえるそう。

「一時間に一〇〇個できたらいいほうですね。六時間フルにがんばって、六〇

〇から八〇〇個でしょう。ネット入れの作業はその日の注文量で若干違いがありますが、特売が入るとさらにスピードが要求されます」

小田さんは就職当時、通勤寮に入っていた。

「それまで勤めていた会社で折り合いがよくないので、転職できないかと相談があり、うちで働き始めましたが、もう八年になります」

常務を評して、「やさしいけれど、怖いときもある」と吉岡さん。作業帽がよく似合う。カラオケが大好きで、「XJヤパンもグレイも、みんな歌えます。音楽を聴くのも好きです」

小田さんと吉岡さんは仲がよく、通勤はいつも一緒。職場が同じなのは、きつと二人の心の安定につながっているはずだ。

「二人は、仲のいいカラオケ仲間です



養豚農場である丹原ファームで活躍する大沢成培さん



うぶ（産み初めの卵）、しんたまご 鶏卵など、さまざまな卵を取り扱っている

よ」  
バック詰めラインで仕事をする渡辺恵美さんは、取材の日はお休みだった。「渡辺さんは、ラインのスピードについていきますね」

川中さんは、これからも障害者の雇用を進めていきたいという。

「パートさんもいろいろな事情で変わりますから、いい方がいれば、臨機応変に採用していきたいですね。機械に携わらない部分で対応できる場所で、どんどん雇用していきたいと思っています」

吉岡さんが「うぶ」をもって、ポーズをとってくれた。あふれるような笑顔。卵がとてもおいしそうに見えた。